



### 戦後の学校に通う児童たち

3月は、これまで級友たちと過ごしてきた学校を離れ、次のステップへと進む時期となります。そこで今回は、終戦から間もない時期の卒業記念写真から当時の児童たちの様子を垣間見たいと思います。

左上の写真は、1949（昭和24）年の嘉数小学校の卒業記念写真です。児童たちの背後には、米軍から払い下げられたコンセットと呼ばれるカマボコ型の簡易的な建物が写っていますが、当時はコンセットなどを校舎として利用していました。また、児童たちを見てみると、服装が似ている子たちがいまいます。これも米軍からの古着などを仕立て直したもので、サイズの合わない服を着る子どもたちも多かったようです。



▲嘉数小学校第一期卒業生1949(昭和24)年

そのほか、履物も様々で、靴、下駄、草履などの子もいれば、裸足の子もいました。次に左下の写真は、1951（昭和26）年に撮影された宜野湾小学校の卒業記念写真です。児童たちの服装は統一感が見られ、女子はリボンを身に付け、ほとんどの男子も学生帽子を被っています。さらには、ボールや野球のバットも写っていることから、当時の遊びの中で野球をしていたことが分かります。

この2枚の写真からは、他にも当時の様子を窺うことができますが、その後の教育環境は紆余曲折しながら徐々に整備され、今では誰もが安心して勉強できるようになりました。

現在、市立博物館では、宜野湾市の教育についての歴史的な流れや、かつて教員をされていた先生方の座談会などを掲載した宜野湾市史別冊『ぎのわん教育のあゆみ』を3月末に刊行する計画を進めています。



▲宜野湾小学校卒業記念1951(昭和26)年

【問合せ】市立博物館 ☎ 870-9317

市立博物館  
イメージキャラクター  
天女ちゃん

## はくぶつかんの 部屋

某の66

博物館の歴史や文化などを紹介します  
新天地を求めて移住した土屋取

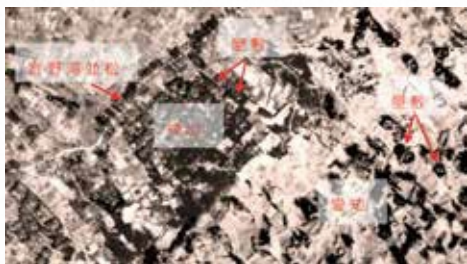
市立博物館では、市内の「字」にスポットを当てることで、自分たちの住む地域を見つめ直すきっかけを目的としている、地域との共同企画展「ぎのわんの字展」にて、「屋取集落編 其之一」を開催しております。「屋取」とは、1700年頃から現れた首里・那覇から地方へと移住した土族層を指します。琉球王国時代には身分制度があり、人々は「士（サムレー）」と「農民（百姓）」に分かれ、士は首里・那覇・泊・久米以外での居住が認められていませんでした。しかし、徐々に士の人口が増加すると、生活に困窮する士たちが増え、首里王府は、1725（雍正3）年から士の転職を許可し、1730（雍正8）年以降は士の地方への移住を奨励するようになりまし

た。そのような背景を受けて、多くの士は、新たな土地や耕作地を求めて田舎へ移住するようになり、宜野湾にも首里や那覇の士たちが移住してきました。

移住してきた士は、元からその土地に住んでいた本集落の人々から土地を借りて生活を始めましたが、その生活はとても過酷なものでした。明治時代に入り、琉球処分後の王国解体、明治30年代の土地整理事業等によって地方への移動は増加し、宜野湾でも人口・戸数ともに増加しました。その結果、1939（昭和14）年7月に従来の14行政区を21行政区（上原・中原・赤道・愛知・長田・志真志・真栄原を新設）に改正し、1943（昭和18）年には佐真下ができ、現在の行政区の礎を築きました。

16回目の開催となる今回の字展では、国道330号に沿った屋取集落の中でも、上原・中原・赤道・愛知・長田・志真志を取り上げ、屋取集落の歩んできた本集落とは異なっただけならず文化を紹介していきます。皆さま、ぜひご観覧ください。

市立博物館 ☎ 870-9317



▲本集落と屋取集落の形態 1945(昭和20)年1月頃  
本集落(神山)は屋敷(地図上の黒い部分)が基盤の目状に整然と集合していますが、屋取集落(愛知)は分散しています。